

「島根県環境に優しい農林漁業創造計画」

環境負荷低減事業活動実施指針 (農業)

令和5年3月

島 根 県

目 次

第 1 「島根県環境に優しい農林漁業創造計画」環境負荷低減事業活動実施指針（農業）について	1
1 指針策定の趣旨	1
2 環境負荷低減事業活動について	1
3 実施指針策定の基本的考え方	5
4 実施計画の作成にあたって	5
第 2 実施すべき環境負荷低減事業活動の内容	6
第 3 環境負荷低減事業活動の実施の促進を図るために必要な事項	7
1 土壌診断の励行	7
2 たい肥等の窒素成分を考慮した施肥設計	7
3 土壌の性質の総合的な改善	7
4 きめ細かな施肥の実施	7
5 発生予察に基づく的確な防除の実施	8
第 4 その他必要な事項	8
1 必要な機械・資材等及び資金の調達	8
2 関係補助事業の積極的な活用	8
農作物別の具体的な事業活動の内容、使用の目安、その他の留意事項	
1 水稻	9
2 麦類	10
3 大豆	11
4 小豆	12
5 そば	13
6 だいこん	14
7 かぶ	15
8 にんじん	16
9 ごぼう	17
10 さといも	18

1 1	やまのいも	1 9
1 2	しょうが	2 0
1 3	れんこん	2 1
1 4	キャベツ	2 2
1 5	はくさい	2 3
1 6	ほうれんそう	2 4
1 7	ねぎ (白ねぎ)	2 5
1 8	ねぎ (葉ねぎ)	2 6
1 9	たまねぎ	2 7
2 0	にら	2 8
2 1	しゅんぎく	2 9
2 2	にんにく	3 0
2 3	らっきょう	3 1
2 4	ふき	3 2
2 5	みょうが	3 3
2 6	畑わさび	3 4
2 7	せり	3 5
2 8	こまつな	3 6
2 9	広島菜	3 7
3 0	みずな	3 8
3 1	のぎわな	3 9
3 2	なばな	4 0
3 3	しそ	4 1
3 4	たかな	4 2
3 5	カリフラワー	4 3
3 6	レタス	4 4
3 7	セルリー	4 5

38	パセリ	46
39	アスパラガス	47
40	ブロッコリー	48
41	モロヘイヤ	49
42	チンゲンサイ	50
43	スイートコーン	51
44	さやえんどう	52
45	さやいんげん	53
46	そらまめ	54
47	きゅうり	55
48	しろうり	56
49	かぼちゃ	57
50	すいか	58
51	メロン	59
52	なす	60
53	トマト	61
54	いちご	62
55	ピーマン	63
56	オクラ	64
57	かんしょ	65
58	ばれいしょ	66
59	ししとう	67
60	ミニトマト	68
61	えだまめ	69
62	ねぎ（葉ねぎ、移植栽培）	70
63	とうがらし	71
64	あすっこ	72

6 5	えごま (葉)	7 3
6 6	ケール	7 4
6 7	ヤーコン	7 5
6 8	実えんどう	7 6
6 9	にがうり	7 7
7 0	えごま (子実)	7 8
7 1	ごま	7 9
7 2	まくわうり	8 0
7 3	ルッコラ	8 1
7 4	非結球レタス	8 2
7 5	ぶどう (デラウェア)	8 3
7 6	ぶどう (巨峰系品種)	8 4
7 7	ぶどう (欧州系及び欧米雑種系品種)	8 5
7 8	かき	8 6
7 9	なし	8 7
8 0	くり	8 8
8 1	いちじく	8 9
8 2	うめ	9 0
8 3	もも	9 1
8 4	りんご	9 2
8 5	すもも (プルーン)	9 3
8 6	ゆず	9 4
8 7	温州みかん	9 5
8 8	おうとう	9 6
8 9	ブルーベリー	9 7
9 0	びわ	9 8
9 1	きく (夏秋)	9 9

9 2	きく（電照抑制）	1 0 0
9 3	きく（電照抑制 二度切り）	1 0 1
9 4	トルコギキョウ	1 0 2
9 5	ばら	1 0 3
9 6	ストック	1 0 4
9 7	りんどう	1 0 5
9 8	アスター	1 0 6
9 9	デルフィニウム	1 0 7
1 0 0	宿根スターチス	1 0 8
1 0 1	宿根カスミソウ	1 0 9
1 0 2	シンテッポウユリ	1 1 0
1 0 3	キンギョソウ	1 1 1
1 0 4	ヒマワリ	1 1 2
1 0 5	ハボタン	1 1 3
1 0 6	さかき	1 1 4
1 0 7	葉たばこ	1 1 5
1 0 8	茶	1 1 6
1 0 9	こんにゃくいも	1 1 7
1 1 0	なたね	1 1 8
1 1 1	うるい	1 1 9
1 1 2	たらのき	1 2 0
1 1 3	イタリアンライグラス	1 2 1
1 1 4	ソルガム	1 2 2
1 1 5	飼料用イネ（WCS 用イネ及び飼料用米）	1 2 3
1 1 6	飼料用とうもろこし	1 2 4

第1 「島根県環境に優しい農林漁業創造計画」環境負荷低減事業活動実施指針(農業)について

1 指針策定の趣旨

環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律（令和4年法律第37号。以下、「法律」という。）が公布されたことに伴い、環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律施行令（令和4年政令第229号。以下、「施行令」という。）及び環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律施行規則（令和4年農林水産省令第42号。以下、「施行規則」という。）が令和4年6月27日付けで公布され、法律と併せ、令和4年7月1日付けで施行された。

この法律は、環境と調和のとれた食料システムの確立に関する基本理念等を定めるとともに、農林漁業に由来する環境への負荷の低減を図るために行う事業活動を促進するための措置及びその基盤を確立するための措置を講ずることにより、環境と調和のとれた食料システムの確立を図り、もって農林漁業及び食品産業の持続的な発展並びに国民に対する食料の安定供給の確保に資するとともに、環境への負荷の少ない健全な経済の発展を図りながら持続的に発展することができる社会の構築に寄与することを目的で制定されたものである。

本実施指針は、農業分野における環境負荷低減事業活動として求められる事業活動の内容に関する事項について定めたものである。

2 環境負荷低減事業活動について

本実施指針の対象となる「環境負荷低減事業活動」は、農業者が、当該農業者の行う農業（当該農業者が団体である場合にあっては、その構成員等の行う農業を含む。）の持続性の確保に資するよう、農業に由来する環境への負荷（以下、「環境負荷」という。）の低減を図るために行う次に掲げる事業活動をいう。

- (1) 堆肥その他の有機質資材の施用により土壌の性質を改善させ、かつ、化学的に合成された肥料及び農薬の施用及び使用を減少させる技術を用いて行われる生産方式による事業活動

- ①たい肥その他の有機質資材の施用に関する技術であって、土壌の性質を改善する効果が高いもの〔土づくり技術〕

技術名	技術の内容
たい肥等有機質資材施用技術	土壌有機物含有量、可給態窒素含有量その他の土壌の性質について調査を行い、その結果に基づき、たい肥その他の有機質資材であって炭素窒素比がおおむね10～150の範囲にあるものを農地に施用する技術 《注意点》施用する種類や量については、土壌診断の結果に基づき適正と考えられるものとし、過剰な施用や未熟なたい肥の施用により、作

	物の生育を悪化させ、又は地下水の汚染等環境に負荷を与えないよう留意する
緑肥作物利用技術	<p>土壌有機物含有量、可給態窒素含有量その他の土壌の性質について調査を行い、その結果に基づき、緑肥作物を栽培して、農地にすき込む技術</p> <p>《注意点》 地域に適合したものを選定する</p>

②肥料の施用に関する技術であって、化学的に合成された肥料の施用を減少させる効果が高いもの [化学肥料低減技術]

技術名	技術の内容
局所施肥技術	<p>肥料を作物の根の周辺に集中的に施用する技術</p> <p>《注意点》 肥料による作物への濃度障害を回避する観点から、農作物の種類、肥料の種類等に応じて施肥する位置等を調整する</p>
肥効調節型肥料施用技術	<p>肥料の品質の確保等に関する法律（昭和25年法律第127号）第2条第2項に規定する普通肥料のうち、アセトアルデヒド縮合尿素、イソブチルアルデヒド縮合尿素、オキサミド、被覆加里肥料、被覆窒素肥料、被覆複合肥料、ホルムアルデヒド加工尿素肥料若しくは硫酸グアニル尿素、これらの肥料の1種以上が原料として配合されるもの又は土壌中における硝酸化成を抑制する材料が使用されたものを施用する技術</p> <p>《注意点》 肥効調節型肥料の種類により肥効パターンが異なることを十分考慮し、農作物の種類、土壌条件及び気象条件に応じて肥料の種類を選択する</p>
有機質肥料施用技術	<p>有機質（動植物質のものに限る）を原料として使用する肥料を施用する技術</p> <p>施用する種類や量については、土壌診断の結果、農作物の種類、含有する肥料分量等を勘案して適正と考えられるものとし、過剰な施肥や未熟なたい肥の施用により、作物の生育や品質を悪化させ、又は環境に著しい負荷を与えることのないよう留意する必要がある</p> <p>《注意点》 本技術で利用される技術には、いわゆる有機入り化成肥料も含まれるが、有機質由来のものが原料ベースで3割以上含まれているものを使用することが望ましい</p>

③有害動植物の防除に関する技術であって、化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高いもの [化学農薬低減技術]

技術名	技術の内容
温湯種子消毒技術	<p>種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着した有害動植物を駆除する技術</p> <p>《注意点》温度や時間等により効果や発芽率等が変動することから、適切な条件で行うこと</p>
機械除草技術	<p>有害植物（有害動物の発生を助長する植物を含む）を機械的方法により駆除する技術</p> <p>なお、本技術には、畦畔における有害動物の発生を助長する植物を機械的方法により駆除する技術が含まれる</p> <p>《注意点》除草用機械による除草を効率的に行えるよう、農作物の栽植様式の調節や圃場の規模に応じた器械の種類の選択を行う</p>
除草用動物利用技術	<p>有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いを行う技術</p> <p>《注意点》除草用動物が野犬等の外敵の被害を受けないよう、柵等で保護するなど適切な条件で行う</p>
生物農薬利用技術	<p>農薬取締法（昭和23年法律第82号）第2条第2項の天敵であって、同法第3条第1項又は第34条第1項の登録を受けたものを利用する技術をいい、捕食性昆虫、寄生性昆虫のほか、拮抗細菌、拮抗糸状菌等を導入する技術及びバンカー植物（天敵の増殖又は密度の維持に資する植物をいう）を栽培する技術等</p> <p>《注意点》害虫の発生密度や施設内の温度湿度等により防除効果が変動することから、適切な条件の下で行う</p>
対抗植物利用技術	<p>土壌中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術</p> <p>《注意点》対抗植物の防除効果は特異性が高いことから、防除対象とする線虫等有害動植物の種類に応じて、その種類を選択する</p>
抵抗性品種栽培・台木利用技術	<p>有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術</p> <p>《注意点》化学的に合成された農薬の使用を低減する効果が明らかにされ、防除対象とする有害動植物の種類や地域の特性に適合したものを選択すること</p>
天然物質由来農薬利用技術	<p>天然物質を原料として製造された農薬を利用する技術</p> <p>《注意点》当該技術として利用することができる農薬については、有機農産物の日本農林規格（平成17年10月27日農林水産省告示第</p>

	<p>1605号) 別表2において、環境への負荷が小さいとされる有機農産物の生産に使用することができるとして定められているもののうち、有効成分が化学的に合成されていないものとして告示で定めたものとする</p>
<p>土壌還元消毒技術</p>	<p>土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術</p> <p>具体的には、畑において、有機物を施用するとともに、土壌中の水分を十分高めた上で、資材により被覆した状態を継続する技術のほか、農業技術センターで防除効果が明らかにされた技術</p> <p>《注意点》土壌を被覆した資材については、使用後の適正な処理を行うとともに、施用する有機物については、肥料成分を勘案し、過剰な施肥にならないようにすること</p>
<p>熱利用土壌消毒技術</p>	<p>太陽熱土壌消毒技術、熱水土壌消毒技術、蒸気土壌消毒技術等、土壌に熱を加えてその温度を上昇させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術</p> <p>《注意点》気象条件や土壌条件を考慮し、効率的に有害動植物を駆除できる最適な方法を選択すること</p>
<p>光利用技術</p>	<p>有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため、有害動植物を誘引し、もしくは忌避させ、又はその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術</p> <p>具体的には、誘因効果を利用する粘着板や非散布型農薬含有テープの利用技術、忌避効果や生理的機能の抑制効果を利用する黄色蛍光灯、シルバーフィルム等の反射資材、紫外線除去フィルムを利用する技術等が含まれる</p> <p>《注意点》粘着板の利用と生物農薬利用技術を組み合わせて行う場合は、粘着板で天敵を誘殺しないように注意する</p>
<p>被覆栽培技術</p>	<p>農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術</p> <p>具体的には、べたかけ栽培技術、雨よけ栽培技術、トンネル栽培技術、袋かけ栽培技術、防虫ネットによる被覆栽培等である。</p> <p>《注意点》有害動物による被害を予防する観点から、最適な被覆資材の選定、被覆状態の維持を行う</p>
<p>フェロモン剤利用技術</p>	<p>農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とする薬剤であって、農薬取締法第3条第1項又は第34条第1項の登録を受けたものを使用する技術</p> <p>《注意点》害虫の発生密度や圃場の規模等により防除効果変動することから、適切な条件で行う</p>

マルチ栽培技術	土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術 《注意点》まん延防止効果を維持する観点から、最適な被覆資材の選択、被覆状態の維持を行う
---------	---

(2) 温室効果ガスの排出（地球温暖化対策の推進に関する法律（平成十年法律第百十七号）第二条第四項に規定する温室効果ガスの排出をいう。）の量の削減に資する事業活動

(3) その他、国が定める「環境負荷低減事業活動の促進及びその基盤の確立に関する基本的な方針」第二の要件に適合し、知事が必要と認める活動

3 実施指針策定の基本的考え方

(1) 農作物の種類

環境負荷低減事業活動の対象となる主要な種類の農作物の選定に当たっては、県内での作付面積、収穫量、生産額その他本県農業における位置付け等を総合的に勘案し、選定した。ただし、今後、環境負荷低減事業活動の普及浸透に併せて、適宜、農作物の追加を行う。

(2) 実施指針の区域

実施する環境負荷低減事業活動が、地域ごとに大きな差異が認められないことから、農作物別に県全体を1つの区域とした。

(3) 環境負荷低減事業活動の内容

法第2条第4項第1号で定められた事業活動については、農作物毎に現時点での知見や試験研究結果に基づき、本県での適応性や市場性等を考慮しできるだけ網羅して、農業者が選択できるように策定した。

同項第2号、第3号で定められた事業活動については、全作物共通事項として策定した。

(4) 使用の目安

- ①たい肥等の投入量、肥料、化学農薬について使用の目安を示した。
- ②肥料の使用の目安は、投入される肥料の窒素分量の全量を示し、そのうち投入される肥料の化学窒素分量を慣行レベルの70%とした。
- ③農薬の使用の目安は、有害動植物の防除に用いる化学農薬の有効成分使用回数を慣行レベルの70%とした。

4 実施計画の作成にあたって

実施指針に示した「使用の目安」や「その他の留意事項」は、環境負荷低減事業活動を実施するにあたっての目標や留意すべき事項を示したものであり、これらは個々の営農条件や技術等に応じて、個別に農業者が定めて実施することとする。

また、実施計画の作成にあたっては、隠岐支庁農林水産局及び各農林水産振興センター（以下、農林水産振興センター等という）の助言と技術指導を受けて作成するものとする。

第2 実施すべき環境負荷低減事業活動の内容

- (1) 堆肥その他の有機質資材の施用により土壌の性質を改善させ、かつ、化学的に合成された肥料及び農薬の施用及び使用を減少させる技術を用いて行われる生産方式による事業活動

※農作物別の具体的な事業活動の内容、使用の目安、その他の留意事項については9頁以降に記載

- (2) 温室効果ガスの排出（地球温暖化対策の推進に関する法律（平成十年法律第百十七号）第二条第四項に規定する温室効果ガスの排出をいう。）の量の削減に資する事業活動

農業機械や、施設園芸での加温設備等における燃油使用に由来する二酸化炭素、農地土壌及び家畜排せつ物の管理並びに家畜の消化管内発酵に由来するメタン及び一酸化二窒素等、農漁業の事業活動に伴って発生する温室効果ガスの排出の量の削減に資する事業活動。

具体的には、農業機械の省エネルギー化・電動化・バイオ燃料への切替え、施設園芸におけるヒートポンプや木質バイオマス加温機等の導入、水田作における秋耕の実施や中干し期間の延長、強制発酵等の温室効果ガスの発生量が少ない家畜排せつ物の管理方法への転換、アミノ酸バランス改善飼料への切替え等の取組のほか、農業の事業活動における再生可能エネルギーの活用等が含まれる。

- (3) その他、国が定める「環境負荷低減事業活動の促進及びその基盤の確立に関する基本的な方針」第二の要件に適合し、知事が必要と認める活動

- ①土壌を使用しない栽培技術を用いて行われ、かつ、化学的に合成された肥料及び農薬の施用及び使用を減少させる技術を用いて行われる生産方式による事業活動
- ②次に掲げる物質の量を減少させる技術を用いて行われる生産方式による事業活動
 - ・家畜のふん尿に含まれる窒素、磷その他の環境への負荷の原因となる物質
 - ・餌料の投与等により流出する窒素、磷その他の環境への負荷の原因となる物質
- ③土壌への炭素の貯留に資する土壌改良資材を、農地又は採草放牧地に施用して行う生産方式による事業活動
- ④生分解性プラスチックを用いた資材の使用その他の取組によるプラスチック使用製品産業廃棄物等（プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律（令和3年法律第60号）第2条第9項に規定するプラスチック使用製品産業廃棄物等をいう。）の排出若しくは流出の抑制若しくはこれらに伴う農林漁業に由来する環境への負荷の低減又は化石資源由来のプラスチックの使用量の削減に資する生産方式による事業活動

- ⑤上記①～④に掲げるもののほか、その地域において通常行われる施肥及び有害動植物の防除と比較して化学的に合成された肥料及び農薬の施用及び使用を減少させる技術並びに生物の多様性の保全その他の環境の保全に資する技術を組み合わせて用いる農業に関する技術を用いて行われる生産方式による事業活動

第3 環境負荷低減事業活動の実施の促進を図るために必要な事項

1 土壌診断の励行

たい肥等の有機質資材の適切な施用を行うためには、土壌診断を実施し、その結果に基づいてたい肥等の施用量を設定することが必要である。

このため、農林水産振興センター等においては、農業者から依頼がある場合に備え、速やかに土壌診断を実施し、結果を知らせることができる体制を整備している。

また、全国農業協同組合連合会島根県本部及び各農業協同組合の土壌診断施設においても、農林水産振興センター等と連携を図りつつ、土壌診断を行う体制が整備されてきている。

このため、環境負荷低減事業活動の実施にあたっては、このような土壌診断体制を積極的に活用し、施肥量等の決定等に関し、農業普及員や営農指導員から、診断結果を踏まえたアドバイスを受け、土壌の性質の改善と施肥の合理化に努める。

2 たい肥等の窒素分量を考慮した施肥設計

たい肥等の有機質資材は種類や腐熟度によって施用後の分解に要する期間が異なるため、肥料成分の有効化の推定が困難であり、上乘せ施用されているのが実状で、このことが、過剰な窒素施肥の要因ともなっている。

肥料の品質の確保等に関する法律（昭和25年法律第127号）により、たい肥等の特殊肥料については窒素、リン酸、加里等の成分表示が義務づけられていることから、施肥設計にあたってたい肥等の窒素成分に留意し、施肥量を決定することが重要である。

3 土壌の性質の総合的な改善

たい肥等有機質資材の施用は、土壌の性質の総合的な改善を行う最も有効な手法であるが、土壌の物理性の根本的な改善や酸度矯正のためには、たい肥の施用だけで不十分な場合もあり、心土破碎、暗渠施工等の物理性の改善や土壌改良資材の投入を図る必要がある。

また、地力増進地域にあつては、地力増進対策指針の内容に即した改善方策を行うことが必要である。

4 きめ細かな施肥の実施

局所施肥を的確に実施するためには、畝を正確に成形できる土壌の物理性の確保、農作物の栽培様式に合わせた施肥機による肥料繰り出し量の調節等が技術的に重要な要素になる。

また、肥効調節型肥料や有機質肥料の利用にあたっては、種類によって肥効発現の速度が異なるため、栽培する農作物の吸肥特性に合致した肥料の適切な選択が必要である。

本県の水稲では、「コシヒカリレベルアップ戦略」に基づき、土壌類型別・肥沃度別施肥基準を定めている。その他の作物についても、前作や生育状況に応じたきめ細かな施肥が必要であり、

生育期間中の土壌や作物の栄養診断等を積極的に活用する。

5 発生予察に基づく的確な防除の実施

環境負荷低減事業活動の実施に取り組む農業者は、病虫害防除所からの精度の高い予察情報等を迅速に入手するとともに、効果的、効率的な防除に努め、特に、天敵農薬やフェロモン剤等による防除の効果的な実施に関し、農業普及員、病虫害防除所等による的確なアドバイスを受けることが重要である。

第4 その他必要な事項

1 必要な機械・資材等及び資金の調達

環境負荷低減事業活動の実施には、新たな営農用機械や資材等を整備する必要があることがある。これらの機械・資材は、慣行の生産方式の実施に用いるものと比較して、高価であるだけでなく、その利用に関しても高度な技術が要求されるものであることから、個々の農業者の経営内容や技術水準を見極めつつ、実施を図る必要がある。

また、これらの農業機械・資材を整備する場合には、取り組みの初期段階における経営的な負担軽減を図る観点から、必要に応じ農業改良資金やその他制度資金の融資制度を活用する。

2 関係補助事業の積極的な活用

環境負荷低減事業活動を試験的に、あるいは地域全体で取り組む場合には、農林水産振興センター等による濃密指導や実証ほの設置等による技術確立、たい肥舎等共同利用施設の建設による生産条件整備が必要になることから、これらを総合的に実施するため、県の補助事業や国庫事業を積極的に活用する。

1 水 稻

水田生産力維持増進のために、たい肥等有機質資材（稲わらたい肥など）または緑肥（レンゲなど）のいずれかの施用を主体に土質の改善を図る。

化学肥料については、側条施肥田植え、肥効調節型肥料の施用、または有機質肥料の施用のいずれか、あるいはこれらの技術の組み合わせにより施用量の節減を図る。

化学農薬については、温湯種子消毒による殺虫殺菌剤の使用削減や除草用動物（アイガモ、コイ）の利用、再生紙マルチ栽培、または中耕除草のいずれかにより除草剤の削減を行い、あわせて耐病性品種の選定、健全な生育の確保、高度な発生予察、生育の初期段階における病害虫防除の徹底により農薬使用回数の節減を図るものとする。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a 以下 (※)
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術（側条施肥田植え） ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 8.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 5.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○温湯種子消毒技術 ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 ○除草用動物利用技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 14回以下
その他の 留意事項	(※) たい肥等の施肥量については、土づくりの進捗状況や土壌診断結果に基づいて決定を行うものとする。 ・稲わらをすき込む場合は、腐熟を促進するため、秋起こしを実施する。 ・緑肥は分解による水田の異常還元をまねく危険性があるため、代掻き直前の施用を避ける。	

2 麦 類

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥等有機質資材の施用を行い、あわせて地下水位、pH等を適正に保つ総合的な土壌改良対策を講じる。</p> <p>化学肥料については、局所施肥、肥効調節型肥料の施用、または有機質肥料の施用のいずれか、あるいはこれらの技術の組み合わせにより施用量の節減を図る。</p> <p>化学農薬については、温湯種子消毒による殺菌剤の使用低減や中耕除草またはマルチ栽培により除草剤の削減を行い、あわせて健全な生育の確保、高度な発生予察、生育の初期段階における病害虫防除の徹底により農薬使用回数の節減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 15.3kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.7kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術 ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 5回以下
その他の 留意事項		

3 大豆

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥等有機質資材の施用を行い、あわせて作土の厚さ、地下水位、pH等を適正に保つ総合的な土壌改良対策を講じる。</p> <p>化学肥料については、局所施肥、肥効調節型肥料の施用、または有機質肥料の施用のいずれか、あるいはこれらの技術の組み合わせにより施用量の節減を図る。</p> <p>化学農薬については、フェロモン剤利用による殺虫剤の削減あるいは中耕除草またはマルチ栽培による除草剤の削減のいずれか、もしくは両方を行い、あわせて健全な生育の確保、高度な発生予察、生育の初期段階における病虫害防除の徹底により農薬使用回数の節減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 5.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 3.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> フェロモン剤利用技術 （対象：ハスモンヨトウ） <input type="checkbox"/> 天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 8回以下
その他の 留意事項		

4 小 豆

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥等有機質資材の施用を行い、あわせて作土の厚さ、地下水位、pH等を適正に保つ総合的な土壌改良対策を講じる。</p> <p>化学肥料については、局所施肥、肥効調節型肥料の施用、または有機質肥料の施用のいずれか、あるいはこれらの技術の組み合わせにより施用量の節減を図る。</p> <p>化学農薬については、フェロモン剤利用による殺虫剤の削減あるいは中耕除草またはマルチ栽培による除草剤の削減のいずれか、もしくは両方を行い、あわせて健全な生育の確保、高度な発生予察、生育の初期段階における病虫害防除の徹底により農薬使用回数の節減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 4.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 3.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> フェロモン剤利用技術 （対象：ハスモンヨトウ） <input type="checkbox"/> 天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項		

5 そ ば

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥等有機質資材の施用を行い、あわせて地下水位、pH等を適正に保つ総合的な土壌改良対策を講じる。</p> <p>化学肥料については、局所施肥、肥効調節型肥料の施用、または有機質肥料の施用のいずれか、あるいはこれらの技術の組み合わせにより施用量の節減を図る。</p> <p>化学農薬については、中耕除草またはマルチ栽培により除草剤の削減を行い、あわせて健全な生育の確保により農薬使用回数の節減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 1t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素分量 3.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 2.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除）	化学農薬の有効成分使用回数 1回以下
その他の 留意事項		

6 だいこん

<p>たい肥を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、化学肥料低減のために被覆肥料を利用する。</p> <p>化学農薬の使用量を低減するために、熱利用土壌消毒、抵抗性品種の利用による病害防除やB T剤等の生物農薬、黄色蛍光灯、反射資材等を活用した害虫防除をおこなう。</p> <p>除草等については、マルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 23.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 16.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、軟腐病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種栽培技術（対象：萎黄病） ○熱利用土壌消毒技術（対象：ネグサレセンチュウ） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ヨトウムシ類） ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥は、冬から春にかけて施用し、よく耕うんしておく。 	

7 かぶ

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については、条間を中耕することにより除草剤を削減し、害虫に対してはB T剤、フェロモン剤を使用し、抵抗性品種の利用による病害防止により使用回数を低減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術 	窒素分量 23.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 16.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種利用技術（対象：根こぶ病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

8 にんじん

<p>たい肥施用により土壌の性質の改善を図るが、岐根等の障害を避けるため前作時に十分施しておく。前作にはセンチュウ類の対抗植物としてマリーゴールドを作付けすることにより、土壌消毒剤の使用を控える。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 22.3kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術（対象：センチュウ） ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 8回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・砕土、整地は十分に行う。 	

9 ごぼう

<p>たい肥施用により土壌の性質の改善を図るが、岐根等の障害を避けるため前作時に十分施しておく。前作にはセンチュウ類の対抗植物としてマリーゴールドを作付けすることにより、土壌消毒剤の使用を控える。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 22.9kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 16.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術（対象：センチュウ） ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 耕土の深い場所で作付けする。連作を嫌うので4～5年は休耕する。 	

10 さといも

<p>堆肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については、マルチ栽培を行い、除草剤を削減し、フェロモン剤や黄色蛍光灯の利用による害虫防除回数の低減を行う。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 22.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術（対象：センチュウ） ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・夏期の乾燥時にはかん水を実施し、生育を促す。 	

1 1 やまのいも

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図る。化学肥料については、肥効調節型肥料の施用により施用量の削減と省力化を図る</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 ○たい肥等有機質資材施用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 30.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 21.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：ヤマノイモコガ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：シロイモジヨウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・連作を嫌うので、長くても2年でほ場を交換する。 ・種芋は病気、センチュウ等に汚染されていない優良種苗を使用する。 	

12 しょうが

<p>有機質に富んだ保水力のよい水田での栽培がよいが、たい肥施用で土壌の性質の改善を図る。肥料も有機質主体の基肥を使用する。</p> <p>熱利用土壌消毒や黄色蛍光灯の利用による化学農薬の使用削減やマルチ栽培を行うことで除草剤を使用しないととも保水性、保温性を高める。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 25.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 18.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○熱利用土壌消毒技術（対象：根腐腐敗病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：アワノメイガ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 11回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・連作すると根茎腐敗病が多くなるので、できれば3年以上休耕する。 	

13 れんこん

<p>地力維持増進のために、堆肥の施用により、土壌改良を図る。</p> <p>化学肥料低減のために肥効調節型肥料を用いた化学肥料の利用率向上を図ったり、施用の一定量を有機質肥料とし、化学肥料代替を図る。</p> <p>病害虫防除は機械除草により化学農薬の低減を図る。また、冬期湛水処理により病害虫発生の低減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 45.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 32.0kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の留意事項		

14 キャベツ

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図る。化学肥料については、肥効調節型肥料の施用により量の削減と省力化を図る。</p> <p>化学農薬については、B T剤を使用するほか、フェロモントラップを利用した高度な発生予察や黄色蛍光灯の利用により農薬使用回数全体の削減と適期の薬剤散布を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 32.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 22.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、軟腐病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種栽培技術（対象：萎黄病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 15回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・発生予察にあたってはフェロモントラップでの調査に併せて、ほ場内の害虫の発生状況を把握したうえで適切な対応をする。 	

15 はくさい

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥については施用の一定量を有機質肥料とし、肥効の均一化、土質の改善を図る。</p> <p>化学農薬については抵抗性品種の利用やB T剤を使用する他、フェロモントラップを利用した高度な発生予察や、黄色蛍光灯の利用により農薬使用全体の削減と適期の薬剤散布を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 38.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 26.8kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫、軟腐病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種栽培技術（対象：根こぶ病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 11 回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

16 ほうれんそう

<p>ハウス果菜類の後作として作付けするが、前作の残肥も考慮して土壌診断の結果に基づいて物理性の改善を主目的としたたい肥の施用や、作物体の健全な育成、品質向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培（雨よけ）や抵抗性品種の利用、熱利用土壌消毒や紫外線除去フィルムの利用により使用低減と品質向上を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 20.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種栽培技術（対象：べと病） ○土壌還元消毒 ○熱利用土壌消毒技術（対象：萎凋病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・紫外線除去フィルム利用技術 （対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。密植を避け通風をよくする。 ・ハウス周辺の除草をする。 	

17 ねぎ（白ねぎ）

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、肥効調節型肥料の施用により化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については管理機等で中耕・土寄せすることにより除草剤の使用回数の削減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 21.7kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：シロイソナダヨトリ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 13回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の周囲に排水溝を設ける。 	

18 ねぎ（葉ねぎ）

<p>土壌診断の結果に基づいて物理性の改善を主目的としたたい肥の施用や、作物体の健全な育成、品質向上を目指した有機質肥料の施用を図る。また、周年栽培で3作程度作付けするので2作目以降は3割程度減肥することにより化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培や粘着板、黄色蛍光灯、紫外線除去フィルム等の利用により使用回数の低減と品質向上を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 22.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：シロイチモンジヨトウ） ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板（対象：スリップス類） ・黄色蛍光灯（対象：シロイチモンジヨトウ） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。密植を避け通風をよくする。 ・ハウス周辺の除草をする。 	

19 たまねぎ

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、肥効調節型肥料の施用により施用量の削減と省力化を図る。</p> <p>化学農薬については条間を中耕することにより除草剤の使用回数を削減するものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 28.9kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 20.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：軟腐病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 22 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・最終追肥は3月中旬とし、収穫後の貯蔵性を向上させる。 	

20 にら

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機成分の入った肥料を施用して化学肥料の施用量を削減する。</p> <p>化学農薬については適期散布で使用回数を減らすとともに、マルチ栽培をすることによって除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 32.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 22.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・深耕により根圏の拡大を図る。 	

21 しゅんぎく

ハウス内での周年栽培や、果菜類及び他の葉菜類との輪作体系の一環として栽培されることが多い。従って、物理性の維持・改善を目的としたたい肥の施用に努めるとともに、前作の残肥も考慮して、土壌分析の結果に基づいた施肥量の適正化や作物の健全な生育・品質向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。

化学農薬については、被覆資材や防虫ネットの活用、BT剤、粘着板、黄色蛍光灯、紫外線除去フィルム等の利用により化学農薬の使用回数低減を図る。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 30.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 21.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術（対象：センチュウ類） ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 ・粘着板（対象：マメハモグリバエ） ・黄色蛍光灯（対象：ヨトウムシ） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場周辺の除草をする。密植を避け、通風を良くする。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・ハウス栽培では、高温期のハウス密閉、太陽熱消毒等の実施により、病害虫及び雑草の防除を行う。 	

2 2 にんにく

<p>たい肥施用で土壌の性質の改善を図る。肥料も有機質主体の基肥を使用するが、酸性の強い圃場では球の肥大が小さいので石灰類で矯正する。</p> <p>マルチ栽培を行うことで除草剤を使用しないとともに保水性、保温性を高める。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 18.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：ネギコガ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項		

23 らっきょう

<p>土壌生産力維持増進のため、土壌診断に基づくたい肥の施用を図る。 施肥については、肥効調節型肥料を用いた化学肥料の利用効率向上や施用の一定量を有機質肥料するなどし、化学肥料の削減・代替を図る。 病害虫防除にあたっては機械防除による化学農薬の削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 1t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 21.5kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術（対象：） ○被覆栽培技術（対象：） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 12回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ウイルスフリー種球を導入すれば、病害が軽減できる。 	

24 ふ き

<p>多肥栽培を行うので、土壌診断に基づき施肥量を加減する。 塩類集積を防ぐため、栽培期間終了後はビニール被覆を取り除くとともに、必要に応じ牧草等のクリーニングクロープを導入する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 5t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 104.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 72.8kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 5回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・種根はウイルス病の汚染、腐れ等が無い優良種苗を使用する。 	

25 みょうが

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図る。 施肥については、施用の一定量を有機質肥料とし、作物体の健全な生育、品質の向上を図る。 化学農薬については、排水、通風の改善等、耕種的防除や反射資材の利用の組み合わせにより、使用回数の低減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 16.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 11.7kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・良質な敷料を施用するなど、地際環境の改善を図る。 	

26 畑わさび

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥については、施用の一定量を有機質肥料としたり、肥効調節型肥料の施用により、施用量の削減を図る。</p> <p>化学農薬については、ほ場環境の改善により、使用回数の削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 14.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.0kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：コナガ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・適地の選定及び遮光資材の有効利用について留意する。 	

27 せり

<p>堆肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については、ハウス被覆を行うとともに密植を避け、通風をよくし使用回数を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 117.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 82.3kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 1回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・密植を避け、通風をよくする ・アブラムシは水に弱いので、深水にして葉先まで水没させ一昼夜後落水する。 	

28 こまつな

ハウス内での周年栽培や、果菜類及び他の葉菜類との輪作体系の一環として栽培されることが多い。従って、物理性の維持・改善を目的としたたい肥の施用に努めるとともに、前作の残肥も考慮して、土壌分析の結果に基づいた施肥量の適正化や作物の健全な生育・品質向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。

病害虫では抵抗性品種の利用や粘着板、反射資材、紫外線除去フィルム等の活用や、BT剤等を利用することによって化学農薬の使用回数削減を図る。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 16.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 11.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：コナガ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種栽培技術（対象：萎黄病） ○土壌還元消毒 ○光利用技術 ・粘着板（対象：アブラムシ類） ・反射資材（アブラムシ類） ・紫外線除去フィルム（対象：灰色かび病） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場周辺の除草をする。密植を避け、通風を良くする。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・ハウス栽培では、高温期のハウス密閉、太陽熱消毒等の実施により、病害虫及び雑草の防除を行う。高温期には、萎黄病に強い品種を選択する。 	

29 広島菜

<p>たい肥施用を中心とした土壌の改善を図るとともに、有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。</p> <p>病害虫防除については、他作物との輪作、栽培適地の選定や抵抗性品種の利用を行った上で、薬剤としてはB T剤等を利用することによって、化学農薬の削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 25.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種栽培技術（対象：根こぶ病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場周辺の除草をする。密植を避け、通風を良くする。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・ハウス栽培では、高温期のハウス密閉、太陽熱消毒等の実施により、病害虫及び雑草の防除を行う。 	

30 みずな

<p>たい肥や有機質肥料の施用により、化学肥料の削減に努める。</p> <p>病害虫については、コナガ、キスジノミハムシの被害を受けやすい。被覆資材や防虫ネット、反射資材の利用と収穫残さの持ち出し、夏季の太陽熱利用消毒などで対応するとともに、農薬としては、B T剤等を利用することによって、化学農薬の使用回数削減に努める。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 39.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 27.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術（対象：雨よけによる病害予防） ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場周辺の除草をする。密植を避け、通風を良くする。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・ハウス栽培では、高温期のハウス密閉、太陽熱消毒等の実施により、病害虫及び雑草の防除を行う。 	

3 1 のざわな

<p>たい肥を主体として土壌性質の改善を図るとともに、化学肥料低減のために有機質肥料を利用する。</p> <p>化学農薬の使用量を低減するために、B T 剤等の生物農薬を活用する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 25.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 2 回以下
その他の 留意事項		

3 2 なばな

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機質肥料と化学肥料を組み合わせ化学肥料を低減する。</p> <p>化学農薬については、マルチ資材を利用し除草をするとともに、生物農薬（B T 剤）や黄色蛍光灯を組み入れた防除により削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 25.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 18.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ヨトウムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 3 回以下
その他の 留意事項		

33 しそ

<p>たい肥施用により土壌を改善し、有機質肥料と化学肥料を組み合わせることで化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については、防虫ネット、黄色蛍光灯による害虫予防や紫外線除去フィルムによる病害防除やマルチ栽培で雑草を抑えることにより低減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 25.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：ハスモンヨトウ、ハダニ類） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類） ○フェロモン剤利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ・紫外線除去フィルム（対象：灰色かび病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の 留意事項		

3 4 たかな

<p>たい肥や有機質肥料の施用により、化学肥料の削減を図る。</p> <p>病害虫については、アブラムシ、コナガ等の被害を受けやすい。防除にあたっては、初期防除に留意し、農薬としては、B T 剤等を利用することによって、化学農薬の使用回数削減に努める。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 29.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 20.7kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 （対象：ネコブ病、センチュウ類等） ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 3 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場周辺の除草をする。密植を避け、通風を良くする。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・ハウス栽培では、高温期のハウス密閉、太陽熱消毒等の実施により、病害虫及び雑草の防除を行う。 	

35 カリフラワー

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機成分の入った肥料を施用して化学肥料の施用量を削減する。</p> <p>化学農薬については生物農薬、黄色蛍光灯の利用や適期散布で使用回数を減らすとともに、マルチ栽培をすることによって除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 24.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.2kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 9回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・乾燥には比較的強いが湿害には弱いので排水に留意する。 	

36 レタス

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、肥効調節型肥料の施用により施用量の削減と省力化を図る。</p> <p>化学農薬については反射資材や紫外線除去フィルムの利用による病虫害防除による使用削減や、マルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 16.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 11.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ・紫外線除去フィルム（対象：菌核病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 9回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。密植を避け、通風をよくする。 	

37 セルリー

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機成分の入った肥料を施用して化学肥料の施用量を削減する。</p> <p>化学農薬については、粘着板利用や適期散布で使用回数を減らすとともに、マルチ栽培をすることにより除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 72.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 50.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板（対象：ハモグリバエ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・根が浅く乾燥には弱いので、土壌水分に注意し、肥料切れをさせない。 	

38 パセリ

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については、生物農薬、フェロモン剤、黄色蛍光灯の利用による使用低減やマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 21.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 3回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

39 アスパラガス

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、マルチ効果により雑草を抑える。</p> <p>化学肥料を低減するために、有機質肥料と化学肥料を組み合わせる。</p> <p>化学農薬を低減するために、粘着板、黄色蛍光灯、被覆栽培、紫外線除去フィルムの利用に併せて自然枯死した茎葉を除去し、株焼処理を行い病害の発生を抑える。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 6t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 30.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 21.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板（対象：スリップス類） ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 12回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・過繁茂を避け、通風をよくする。 	

40 ブロッコリー

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、肥効調節型肥料の施用により施用量の削減と省力化を図る。</p> <p>化学農薬については、抵抗性品種の利用やB T剤、黄色蛍光灯を利用するほか、フェロモントラップを利用した高度な発生予察を行い、農薬使用回数の削減と適期の薬剤散布を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 36.1kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 25.2kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種利用技術（対象：根こぶ病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 12回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・発生予察にあたってはフェロモントラップでの調査に併せて、ほ場内の害虫の発生状況を把握したうえで適切な対応をする。 	

4 1 モロヘイヤ

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機質肥料の施用により 化学肥料の施用量の削減を図る。</p> <p>マルチ栽培により、除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 24.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 4 回以下
その他の 留意事項		

4 2 チンゲンサイ

ハウス内での周年栽培や、果菜類及び他の葉菜類との輪作体系の一環として栽培されることが多い。従って、物理性の維持・改善を目的としたたい肥の施用に努めるとともに、前作の残肥も考慮して、土壌分析の結果に基づいた施肥量の適正化や作物の健全な生育・品質向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。

病害虫ではコナガ、被覆資材、防虫ネット、反射資材の利用や、B T剤等を利用することによって化学農薬の使用回数削減を図る。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 19.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 13.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 （対象：ネコブ病、センチュウ類等） ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 3回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場周辺の除草をする。密植を避け、通風を良くする。収穫残さの除去を徹底する。ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・ハウス栽培では、高温期のハウス密閉、太陽熱消毒等の実施により、病害虫及び雑草の防除を行う。 	

4 3 スイートコーン

<p>たい肥を主体として土壌の性質を改善を図るとともに、化学肥料の低減を図るために有機質肥料と化学肥料を組み合わせる。実施を行う。</p> <p>化学農薬については、播種後べたがけ資材によるトンネル被覆を行い、生育初期の害虫を抑え、生物農薬や黄色蛍光灯を利用するとともに、マルチ栽培による雑草防除により使用削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 31.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 21.8kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：オオタバコガ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：アワノメイガ） 	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の留意事項		

4 4 さやえんどう

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬についてはマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 16.5kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 11.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：シロイモノゴトウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

45 さやいんげん

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培（雨よけ）や紫外線除去フィルムの利用、反射資材により使用回数の削減と品質向上を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 14.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.3kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：ハダニ類） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ・紫外線除去フィルム（対象：灰色かび病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・前作のあとハウス内に十分灌水してほ場の水分を均一化する。 ・ハウス周辺の除草を行う。 	

46 そらまめ

たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 17.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.3kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	・種子は無病の種子を使用する。	

47 きゅうり

<p>長年の連作により、土壌への養分の過剰な蓄積や不均衡、物理性の悪化が懸念される。そこで、土壌診断の結果に基づいて、物理性の改善を主目的としたたい肥の施用や、作物体の健全な育成、品質向上を目指した有機質肥料を施用する。</p> <p>化学農薬については抵抗性台木の利用や熱利用土壌消毒、被覆栽培や紫外線除去フィルムの利用とマルチ栽培、粘着板や、反射資材、天敵の利用により使用回数の削減と品質向上を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 46.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 32.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、鱗翅目害虫、ネコブセンチュウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 （対象：シロイチモンジヨトウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性台木利用技術（対象：つる割病） ○熱利用土壌消毒技術（対象：苗立枯病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板（対象：アブラムシ類） ・反射資材（対象：スリップス類） ・紫外線除去フィルム（対象：灰色かび病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 27回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・一定期間、天井部分の被覆物を除去し、雨にあてることが望ましい。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・天敵の利用に当たっては対象害虫の初発時期を見計らう。 	

48 しろうり

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥の一定量を有機質肥料とし、化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については抵抗性台木の利用や反射資材による使用削減やマルチ栽培により、除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 4t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 25.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 18.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性台木利用技術（対象：つる割病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材利用技術（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・整枝作業を適期に行い、過繁茂としない。 	

49 かぼちゃ

土壌の性質の改善を図るためたい肥施用をするが、つるぼけを防ぐため肥料成分の少ないたい肥を使用する。また、基肥も有機質肥料中心で控えめに施用し、着果を確認してから追肥を行う。

化学農薬の低減のため、マルチ栽培により除草剤を使わない他、排水対策、敷きわらにより病害の発生を防ぐ。また、害虫の飛来回避と初期生育の促進のためホットキャップを被覆し、除去後は粘着板や反射資材を利用する。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素分量 13.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 9.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：ネブセンチュウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 ・粘着板（対象：アブラムシ類） ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	・根は広く伸びるが浅いので、高畝にしてやる。	

50 すいか

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥のほぼ半量を有機質肥料とし、果実の品質向上や収量の向上を図る。</p> <p>連作する場合は、抵抗性台木を利用したり、熱利用土壌消毒により障害を回避する。</p> <p>また、マルチ資材、反射資材を利用し、防除回数と除草剤の低減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 22.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：アブラムシ類、ハダニ類、オオタバコガ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：害虫回避、雑草防除） ○抵抗性台木利用技術（対象：つる割病） ○熱利用土壌消毒技術（対象：黒点根腐病） ○光利用技術 ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 13回以下
その他の 留意事項		

5 1 メロン

<p>長年の連作により、土壌への養分の過剰な蓄積や不均衡、物理性の悪化が懸念される。そこで、土壌診断の結果に基づいて、物理性の改善を主目的としたたいの施用や、作物体の健全な育成、糖度等の品質向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については、抵抗性品種・台木の利用や熱利用土壌消毒を行うほか、被覆栽培、マルチ栽培はもちろんのこと、島根県のメロン栽培の特徴であるアムスの立体栽培を行うことや反射資材等の利用により、使用回数の削減と品質向上を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 12.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 8.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：コナジラミ類、アブラムシ類、アザミウマ類、鱗翅目害虫、ネコブセンチュウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：害虫回避、雑草防除） ○抵抗性品種・台木利用技術（対象：つる割病） ○熱利用土壌消毒技術（対象：黒点根腐病） ○光利用技術 ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 9 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・一定期間、天井部分の被覆物を除去し、雨にあてることが望ましい。 ・ハウス周辺の除草を行う。 	

5 2 な す

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥量の半量以上を有機質肥料とし、果実の品質向上や収量の増加を図る。</p> <p>化学農薬については抵抗性品種・台木の利用やB T剤、黄色蛍光灯の利用により使用削減を行うとともに、マルチ栽培により除草剤は使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 75.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 52.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類、鱗翅目害虫、灰色かび病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種・台木利用技術（対象：青枯病） ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 18回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・周囲に防風ネットを張る。 	

53 トマト

<p>長年の連作により、土壌への養分の過剰な蓄積や不均衡、物理性の悪化が懸念される。そこで、土壌診断の結果に基づいて、物理性の改善を主目的としたたい肥の施用や、作物体の健全な育成、品質向上を目指した有機質肥料を施用する。</p> <p>化学農薬については、抵抗性品種・台木の利用、熱利用土壌消毒や被覆栽培・紫外線除去フィルムの利用、マルチ栽培はもちろんのこと、天敵の導入 粘着板、非散布型農薬含有テープ、反射資材、黄色蛍光灯等を利用し使用回数の削減と品質向上を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 30.7kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 21.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、オンシツコナジラミ、ネコブセンチュウ、灰色かび病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種・台木利用技術（対象：青枯病） ○土壌還元消毒 ○熱利用土壌消毒技術（対象：萎凋病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板、非散布型農薬含有テープ （対象：コナジラミ類） ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ・反射資材（対象：スリップス類） ・紫外線除去フィルム（対象：灰色かび病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 21 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・一定期間、天井部分の被覆物を除去し、雨にあてることが望ましい。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・天敵の利用にあたっては対象病虫害の発生時期を見計らう。 	

5 4 いちご

<p>長年の連作により、土壌への養分の過剰な蓄積や不均衡、物理性の悪化が懸念される。そこで、土壌診断の結果に基づいて物理性の改善を主目的としたたい肥の施用や、作物体の健全な育成、品質向上を目指した有機質肥料の施用を図る。</p> <p>化学農薬については、熱利用土壌消毒や被覆栽培とマルチ栽培、天敵の利用、黄色蛍光灯等により使用回数の削減と品質向上を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 24.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 16.7kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類、灰色かび病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○土壌還元消毒 ○熱利用土壌消毒技術（対象：萎黄病） ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：ハスモンヨトウ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 （硫黄薫蒸を除く） 32 回以下 硫黄燻煙回数（硫黄燻煙を行う 場合） 35 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・一定期間、天井部分の被覆物を除去し、雨にあてることが望ましい。 ・ハウス周辺の除草を行う。 	

55 ピーマン

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥の半量以上を有機質肥料とし、果実の品質向上や収量の増加を図る。</p> <p>化学農薬については抵抗性台木の利用や熱利用土壌消毒、被覆栽培・資材線除去フィルムや粘着板、非散布型農薬含有テープの利用、反射資材や黄色蛍光灯等により使用低減するとともにマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 33.7kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 23.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性台木利用技術（対象：疫病） ○熱利用土壌消毒技術（対象：青枯病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板・非散布型農薬含有テープ利用技術 （対象：コナジラミ類） ・黄色蛍光灯（対象：オオタバコガ） ・反射資材（対象：アブラムシ類） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 17回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。密植を避け、通風をよくする。 	

56 オクラ

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については反射資材等による使用低減やマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 21.3kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：オオタバコガ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：スリッパス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

57 かんしょ

<p>施肥の半量以上を有機質肥料とし、品質向上や収量の増加を図る。 化学農薬についてはマルチ栽培により除草剤を減量する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 1t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 7.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 5.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：ハスモンヨトウ、ネコブセンチュウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 （対象：鱗翅目害虫、コガネムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ウイルスフリー苗等の優良苗を使用する。 	

58 ばれいしょ

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については生物農薬や反射資材等の利用による使用削減やマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 18.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：軟腐病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：ハスモンヨトウ） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

59 ししとう

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥の半量以上を有機質肥料とし、果実の品質向上や収量の増加を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培・紫外線除去フィルムや反射資材、生物農薬等の利用による使用削減やマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 36.5kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 25.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：スリップス類等） ・紫外線除去フィルム（対象：灰色かび病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。密植を避け、通風をよくする。 	

60 ミニトマト

長年の連作により、土壌への養分の過剰な蓄積や不均衡、物理性の悪化が懸念される。そこで、土壌診断の結果に基づいて、物理性の改善を主目的としたたい肥の施用や、作物体の健全な育成、品質向上を目指した有機質肥料を施用する。

化学農薬については、抵抗性品種・台木利用や熱利用土壌消毒や被覆栽培・紫外線除去フィルムの利用、マルチ栽培はもちろんのこと、天敵利用や粘着板・非散布型農薬含有テープ、反射資材、黄色蛍光灯等の利用により使用削減と品質向上を図るものとする。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 3 t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 16.7kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 11.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、オンシツコナジラミ、ネコブセンチュウ、灰色かび病） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○抵抗性品種・台木利用技術（対象：萎凋病） ○熱利用土壌消毒技術（対象：萎凋病） ○光利用技術 ・粘着板、非散布型農薬含有テープ （対象：コナジラミ類） ・黄色蛍光灯（対象：オオタバコガ） ・反射資材（対象：スリップス類等） 紫外線除去フィルム（対象：灰色かび病） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 15 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・一定期間、天井部分の被覆物を除去し、雨にあてることが望ましい。 ・ハウスの開閉部を防虫ネット等で被覆する。 ・天敵の利用にあたっては対象病害虫の発生時期を見計らう。 	

6 1 えだまめ

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、有機質肥料の施用により、化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については、フェロモン剤、反射資材の利用により使用低減を行うとともに、機械除草やマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 5.3kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 3.7kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○フェロモン剤利用技術 ○光利用技術 ・反射資材（対象：アブラムシ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 5回以下
その他の 留意事項		

6 2 ねぎ（葉ねぎ、移植）

<p>直播に比べ本ばでの生育期間が短く、下層に根が伸びにくいので、堆肥等を投入し、土づくりをしっかり行う。</p> <p>育苗時の健苗育成に努め、予察により適期防除を行い農薬の使用を低減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素成分量 22.3kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> 対抗植物利用技術 （対象：シロイチモジヨトウ） <input type="checkbox"/> 被覆栽培技術 <input type="checkbox"/> フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術 <input type="checkbox"/> 光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板（対象：スリップス類） ・黄色蛍光灯（対象：シロイチモジヨトウ） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） <input type="checkbox"/> 生物農薬利用技術 <input type="checkbox"/> 熱利用土壌消毒技術 <input type="checkbox"/> 天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 8 回以下
その他の 留意事項		

63 とうがらし

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥の半量以上を有機質肥料とし、果実の品質向上や収量の増加を図る。</p> <p>排水性、通気性の良い圃場を選定し、堆肥等の投入による土づくりを行い、。</p> <p>定植後は、パオパオ等の被覆で活着を促進し初期生育を確保する。</p> <p>梅雨期に斑点細菌病が発生しやすいので、草勢が落ちないように管理し、殺菌剤の使用を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 15.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（雑草防除） ○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ○光利用技術 ・反射資材利用技術（対象：アブラムシ等） ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 5回以下
その他の 留意事項		

64 あすっこ

<p>葉や茎が風で折れやすいので、防風対策を行い病害の発生を抑える。 生育初期は、湿害に弱いので、水田で栽培する場合は、高畦とする。 適期に播種し、年内の生育量を確保し、増収を図るとともに、早植による害虫被害を防止し、殺虫剤の使用を削減する。 生物農薬の利用により化学合成農薬の使用を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 43.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 30.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（雑草防除） <input type="checkbox"/> 生物農薬利用技術（コナガ等） <input type="checkbox"/> 光利用技術 <input type="checkbox"/> 被覆栽培技術 <input type="checkbox"/> フェロモン剤利用技術 <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術（雑草防除） <input type="checkbox"/> 天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項		

65 えごま（葉）

<p>多肥により軟弱徒長や病害の発生が多くなるので、たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成をめざした有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については、アブラムシ、ハダニ等の初期発生を逃さないように防除し、農薬の使用回数を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 1t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 15.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.6kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術 ○光利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術 ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 0 回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・過湿が続くと根腐れを起こすので、排水のよい圃場を選定する。 ・1 m以上になるので、倒伏しないように支柱等で誘引する。 	

66 ケール

<p>堆肥等を施用し、根張りを良くし旺盛な生育を進める。 有機質肥料や肥効調節型肥料を用い化学肥料の使用を削減する。 生物農薬やフェロモン剤の利用により、農薬の使用を低減するほか、機械除草等により雑草を抑制し、除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 40.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 28.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：コナガ等） ○光利用技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：コナガ等） ○マルチ栽培技術 ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項		

67 ヤーコン

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬についてはマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 10.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 7.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 0回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

68 実えんどう

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬についてはマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 18.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 13.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：シロイソナダヨトウ） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

69 にがうり

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥の一定量を有機質肥料とし、化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については反射資材による使用削減やマルチ栽培により、除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 24.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 ・反射資材利用技術（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 5回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・整枝作業を適期に行い、過繁茂としない。 	

70 えごま（子実）

<p>多肥により軟弱徒長や病害の発生が多くなるので、たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成をめざした有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬については、機械除草やマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術	たい肥 1t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素分量 13.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 9.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術	化学農薬の有効成分使用回数 0回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・過湿が続くと根腐れを起こすので、排水のよい圃場を選定する。 ・1 m以上になるので、倒伏しないように支柱等で誘引する。 	

7 1 ごま

<p>たい肥施用を主体とした有機質資材の投入により、土壌の保水性、排水性の改善を図るとともに、有機質肥料の施用により化学肥料の施用量の削減を図る。</p> <p>化学農薬については、機械除草やマルチ栽培により除草剤を使用しない栽培とする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 12.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 8.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○マルチ栽培技術 ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 0 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。連作、密植を避け、通風をよくする。 	

72 まくわうり

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、施肥の一定量を有機質肥料とし、化学肥料の削減を図る。</p> <p>化学農薬については反射資材による使用削減やマルチ栽培により、除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 10.7kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 7.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術（対象：つる割病） ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 ・反射資材利用技術（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・整枝作業を適期に行い、過繁茂としない。 	

73 ルッコラ

<p>ハウス内での周年栽培や他の葉菜類との輪作体系の一環として栽培される。物理性の維持・改善を目的としたたい肥の施用に努めるとともに、土壌分析の結果に基づいた施肥量の適正化や作物の健全な生育・品質向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の削減を図る。病害虫では粘着板、反射資材等の活用によって化学農薬の使用を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 9.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 6.7kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材利用技術（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 0回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 	

7 4 非結球レタス

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、肥効調節型肥料の施用により施用量の削減と省力化を図る。</p> <p>化学農薬については反射資材や紫外線除去フィルムの利用による病虫害防除による使用削減や、マルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 22.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○対抗植物利用技術 ○被覆栽培技術 ○フェロモン剤利用技術（対象：鱗翅目害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材利用技術（対象：アブラムシ類） ・紫外線除去フィルム（対象：菌核病） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 4回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 	

75 ぶどう（デラウェア）

土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。また、土壌改良範囲を樹冠占有面積の1/3～2/5とし、根域を制限し根を幹を中心にした狭い範囲に集中することによって施肥範囲も制限され、肥料吸収効率を高める土壌改良を行う。

土壌診断や樹体栄養診断の結果に基づいて、肥効調節型肥料や有機質肥料の施用によりの確な施肥を行う。

化学農薬については、被覆栽培（雨除け、袋かけ）、マルチ栽培や、生物農薬、フェロモン剤、黄色蛍光灯、反射資材等を利用し、農薬使用回数の削減を図るものとする。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 たい肥の施用による土壌の肥沃化を促進する。 土壌改良範囲は樹冠面積の1/3～2/5とする。 ○緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素成分量 21.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ・中耕・機械除草 ○被覆栽培技術（対象：雨よけによる病害予防） ○生物農薬利用技術（対象：ハダニ類） ○フェロモン剤利用技術（対象：ハマキムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：病害予防、雑草） ・病害防除を目的に開花前からビニルマルチを行いハウス内の湿度を下げる。 ○光利用技術 ・粘着板（対象：スリップス類） ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ・反射資材（対象：スリップス類） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 14回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ぶどうの加温栽培では、樹勢低下が目立ち始めており、その対策として植栽本数を50%増やす（40本～60本/10a）。また、樹勢に見合った作型の設定を行うとともに加温を行う前から地温を上昇させ根の活性を高めておく。 冬季樹皮剥ぎを行い、越冬病害虫の防除を行う。 	

76 ぶどう（巨峰系品種）

土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。また、土壌改良範囲を樹冠占有面積の1/3～2/5とし、根域を制限し根を、幹を中心にした狭い範囲に集中することによって施肥範囲も制限され、肥料吸収効率を高める土壌改良を行う。

土壌診断や樹体栄養診断の結果に基づいて、肥効調節型肥料や有機質肥料の施用によりの確な施肥を行う。

化学農薬については、被覆栽培（雨除け、袋かけ）、マルチ栽培や、生物農薬、フェロモン剤、黄色蛍光灯、反射資材等を利用し、農薬使用回数の削減を図るものとする。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・たい肥の施用による土壌の肥沃化を促進する。 土壌改良範囲は樹冠面積の1/3～2/5とする。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 14.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ・中耕・機械除草 ○被覆栽培技術（対象：雨よけによる病害予防） ○生物農薬利用技術（対象：ハダニ類） ○フェロモン剤利用技術（対象：ハマキムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：病害予防、雑草） ・病害防除を目的に開花前からビニルマルチを行いハウス内の湿度を下げる。 ○光利用技術 ・粘着板（対象：スリップス類） ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ・反射資材（対象：スリップス類） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 15回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ぶどうの加温栽培では、樹勢低下が目立ち始めており、その対策として植栽本数を50%増やす（40本～60本/10a）。また、樹勢に見合った作型の設定を行うとともに加温を行う前から地温を上昇させ根の活性を高めておく。 ・冬季樹皮剥ぎを行い、越冬病害虫の防除を行う。 	

77 ぶどう（欧州系及び欧米雑種系品種（※））

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。また、土壌改良範囲を樹冠占有面積の1/3～2/5とし、根域を制限し根を、幹を中心にした狭い範囲に集中することによって施肥範囲も制限され、肥料吸収効率を高める土壌改良を行う。</p> <p>土壌診断や樹体栄養診断の結果に基づいて、肥効調節型肥料や有機質肥料の施用によりの確な施肥を行う。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培（雨除け、袋かけ）、マルチ栽培や、生物農薬、フェロモン剤、黄色蛍光灯、反射資材等を利用し、農薬使用回数の削減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・たい肥の施用による土壌の肥沃化を促進する。 土壌改良範囲は樹冠面積の1/3～2/5とする。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 11.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 7.7kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ・中耕・機械除草 ○被覆栽培技術（対象：雨よけによる病害予防） ○生物農薬利用技術（対象：ハダニ類） ○フェロモン剤利用技術（ハマキムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：病害予防、雑草） ・病害防除を目的に開花前からビニルマルチを行いハウス内の湿度を下げる。 ○光利用技術 ・粘着板（対象：スリップス類） ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ・反射資材（対象：スリップス類） ・紫外線除去フィルム（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 16回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ぶどうの加温栽培では、樹勢低下が目立ち始めており、その対策として植栽本数を50%増やす（40本～60本/10a）。また、樹勢に見合った作型の設定を行うとともに加温を行う前から地温を上昇させ根の活性を高めておく。 ・冬季樹皮剥ぎを行い、越冬病害虫の防除を行う。 	

（※）デラウェア及び巨峰系品種を除く

78 かき

土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。また、土壌改良範囲を樹冠占有面積の1/3～2/5とし、根域を制御することによって施肥範囲も制限され、肥料吸収効率を高める土壌管理を行う。

かき園の施肥量は、結実促進のため樹勢を制御することが重要なため、漸減傾向にあるものの、地力の低い園においては多肥栽培が行われている。傾斜地園では肥料の流亡を抑制するため、肥効調節型肥料や有機質肥料の施用を図る。また、土壌診断及び樹体栄養診断の結果に基づいて的確な施肥を行う。

化学農薬については、発生予察に基づく的確な防除、生物農薬、フェロモン剤及び黄色蛍光灯の利用、反射資材やハウス栽培・マルチ栽培・機械除草により農薬使用回数の削減を図るものとする。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・たい肥の施用による土壌の肥沃化を促進する。また、土壌改良範囲を樹冠占有面積の1/3～2/5とし、その部分へ土壌容積1 m³当たり100g程度の吸収根を発生させるような土壌管理を行う。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 14.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.3kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：アカイガ、イガ類） ○被覆栽培技術（対象：各種病害虫） ○フェロモン剤利用技術 （対象：スカシバ類、ハマキムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） <ul style="list-style-type: none"> ・着色前から70%程度の被覆率で反射マルチを設置する。 ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ・反射資材（対象：スリップス類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 14回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・園内及び樹冠内の通風を良くするよう新梢管理を徹底し、病害の軽減を図る。 	

79 なし

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断の結果に基づいて有機質肥料中心の的確な施肥体系とする。また、栄養診断を適時行い、的確な追肥を行う。傾斜地園では肥料分の流亡が多い。施肥効率を高めるように、局部改良などによって根域を制限し、吸収根の密度を高める。</p> <p>化学農薬については、発生予察に基づく的確な防除、フェロモン剤、黄色蛍光灯の利用または袋かけ、機械除草により農薬使用回数の削減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・たい肥の施用による土壌の肥沃化を図る。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施肥技術 ○有機質肥料施用技術 ・元肥は有機質肥料を中心に施用する。 	窒素成分量 19.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 13.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術（対象：各種病害虫） ○フェロモン剤利用技術 （対象：シンクイムシ類、ハマキムシ類） ○マルチ栽培技術 ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 22回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・病害抵抗性品種の導入を図るとともに、落葉処理、粗皮削りなどの耕種的防除を徹底する。 ・新梢などの夏季管理を徹底し、樹冠内の通風を良好にして病害の軽減を図る。 	

80 く り

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。 土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。 化学農薬については、機械除草、天然物質由来農薬利用により農薬使用回数の削減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・敷き草等による園地内での有機物の確保に努める。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 17.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・園地の中にせん定枝や枯死樹、枯死枝等を放置しないよう園地の清掃を行い、生育期間中の樹幹周りの除草を徹底する。 	

8 2 う め

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。</p> <p>化学農薬については、フェロモン剤の利用、マルチ栽培（稲わら）・機械除草により農薬使用回数の削減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・敷き草や稲わらマルチ等により園内での有機物確保を行う。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 14.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○フェロモン剤利用技術 （対象：スカシバ類、シンクイムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 10 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・防風対策の徹底を図り，休眠期の防除を徹底する。 ・落葉処理などの耕種的防除を徹底する。 	

83 もも

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。</p> <p>化学農薬については、ハウス栽培、フェロモン剤、黄色蛍光灯の利用または袋かけ、マルチ栽培（稲わら）・機械除草により農薬使用回数の削減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・稲わらマルチ等を利用しながら肥沃化を図る。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 15.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術（対象：ハマキムシ類） ○被覆栽培技術（対象：各種病害虫） ○フェロモン剤利用技術 （対象：スカシバ類、シンクイムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 14回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・防風対策の徹底を図り、休眠期の防除を徹底する。 	

84 りんご

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。</p> <p>化学農薬については、ハウス栽培、フェロモン剤、黄色蛍光灯の利用または袋かけ、マルチ栽培（稲わら）・機械除草により農薬使用回数の削減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・たい肥などを利用して土壌の肥沃化を図る。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 19.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 13.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：ハマキムシ類、ヒメモンシロドウガ、アメリカシロヒトリ） ○被覆栽培技術（対象：各種病害虫） ○フェロモン剤利用技術 （対象：スカシバ類、シンクイムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 22回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・園内の通風を良好にするよう新梢管理を徹底し、病害の低減を図る。 ・反射マルチを設置して病害抑制と同時に果実品質向上を図る。 	

85 すもも（プルーン）

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。</p> <p>化学農薬については、ハウス栽培、フェロモン剤、粘着板や黄色蛍光灯の利用、マルチ栽培（稲わら）・機械除草により農薬使用回数の削減を図ることとする。本県では、果実品質向上のためハウス栽培が前提となる。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・たい肥を中心に施用し、土壌の肥沃化を図る。 また、根域を樹冠占有面積 1/3～2/5 としてその部分の肥沃化を図るような土壌改良をすすめる。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 17.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 11.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術（対象：各種病害虫） ○フェロモン剤利用技術 （対象：スカシバ類、シンクイムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・粘着板（対象：スリップス類） ・黄色蛍光灯（対象：夜蛾類、カメムシ） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 9回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・水田転換園では排水対策を徹底し、樹勢強化を図る。 ・休眠期防除の徹底を図る。 	

86 ゆず

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。また、逐次葉分析等を行い適正な追肥を行う。</p> <p>化学農薬については、マルチ栽培（稲わら）・機械除草、天然物質由来農薬利用により農薬使用回数の削減を図ることとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・たい肥を中心に施用し，土壌の肥沃化を図る。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 17.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・密生した樹冠内部の新梢管理を徹底するなどの耕種的防除を徹底する。 	

8 7 温州みかん

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。また、逐次葉分析等を行い適正な追肥を行う。</p> <p>化学農薬については、機械除草・マルチ栽培（稲わら）、天然物質由来農薬利用により農薬使用回数の削減を図ることとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 たい肥を中心に施用し、土壌の肥沃化を図る。 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 24.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 14 回以下
その他の 留意事項	密生した樹冠内部の新梢管理を徹底するなどの耕種的防除を徹底する。	

88 おうとう

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。</p> <p>化学農薬については、ハウス栽培、フェロモン剤の利用、マルチ栽培（稲わら）・機械除草により農薬使用回数の削減を図ることとする。本県では、果実品質向上のためハウス栽培が前提となる。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 17.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> 生物農薬利用技術（対象：ハマキムシ類） <input type="checkbox"/> 被覆栽培技術（対象：各種病害） <input type="checkbox"/> フェロモン剤利用技術（対象：ハマキムシ類） <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> 天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 11回以下
その他の 留意事項		

89 ブルーベリー

<p>土壌生産力維持増進のために、たい肥の施用を図る。たい肥は、肥料分の少ないバークたい肥等を用いる。</p> <p>土壌診断に基づき肥効調節型肥料や有機質肥料中心の施肥とする。</p> <p>化学農薬については、フェロモン剤の利用、マルチ栽培（稲わら）・機械除草により農薬使用回数の削減を図ることとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 16.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 11.3kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> 被覆栽培技術 <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> 天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 3回以下
その他の 留意事項		

9 1 き く (夏秋)

<p>本作型は高温期の出荷となり出荷後の切り花の日持ち性が問題となる。このため土壌改良による根の活性維持が重要なポイントとなる。そこでたい肥の施用による地力維持と有機質肥料の組み合わせにより施肥効率の向上と品質・収量の維持を図る。</p> <p>化学農薬については、熱利用土壌消毒や被覆栽培による白さび病、アブラムシ類等の予防、光利用技術による防除やマルチ栽培により雑草の発生抑制を行い、農薬使用回数の削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 ・定植時に有機質肥料を施用する。	窒素成分量 25.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 17.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○生物農薬利用技術 (対象：根頭がんしゅ病、鱗翅目害虫) ○被覆栽培技術 (対象：白さび病、黒斑病、褐斑病、アブラムシ類、ハダニ類等) ○マルチ栽培技術 (対象：雑草防除) ○熱利用土壌消毒技術 (対象：立枯病等) ○光利用技術 ・黄色蛍光灯 (対象：ヨトウムシ等) ・反射資材 (対象：スリップス類) ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 22 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開閉部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、施設周辺の除草を行う。 	

9 2 き く (電照抑制)

<p>主要産地は砂質土壌であるため、保肥力が低い。一方長年の連作により塩基バランスの偏り等も見られる。そこで土壌診断とこれに基づいたたい肥と有機質肥料を基本とする施肥体系により長期安定生産を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培を行うとともに、熱利用土壌消毒や黄色蛍光灯の利用による病虫害防除や雑草抑制対策としてマルチを活用し、使用削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 ・定植前に有機質肥料を中心に施用する。	窒素分量 77.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 54.4kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 (対象：根頭がんしゅ病、鱗翅目害虫) ○被覆栽培技術 (対象：白さび病、アブラムシ類、スリップス類等) ○マルチ栽培技術 (対象：雑草防除) ○熱利用土壌消毒技術 (対象：立枯病等) ○光利用技術 ・黄色蛍光灯 (対象：ヨトウムシ等) ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 37回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開閉部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、施設周辺の除草を行う。 	

9 3 き く (電照抑制 二度切り)

<p>本作型は長期間にわたる栽培であるため、地力の高低並びに施肥の適否によって品質が大きく左右される。このためたい肥の施用と有機質肥料の組み合わせによって施肥効率の向上と品質・収量の維持を図る。</p> <p>化学農薬については、病虫害発生好適環境を踏まえた、予防を中心とした効率的防除を行うとともに雑草抑制対策として適正地温の維持を兼ねてマルチを活用し、農薬使用回数の低減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 ・定植時に有機質肥料を中心に施用する。	窒素成分量 40.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 28.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○生物農薬利用技術 (対象：根頭がんしゅ病、鱗翅目害虫) ○被覆栽培技術 (対象：白さび病、アブラムシ類、スリップス類、ヨトウムシ類等) ○マルチ栽培技術 (対象：雑草防除) ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 37 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開閉部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、施設周辺の除草を行う。 	

9 4 トルコギキョウ

<p>全国的な生産拡大に伴って産地間競争が激化し、高品質生産の必要性が一層高まりつつある。一方、新規栽培者の参入により熟畑化の進んでいないほ場も増えつつあり、これらの早期の地力向上が必要となっている。このためたい肥と有機質肥料の組み合わせによって施肥効率の向上と品質・収量の向上を図る。</p> <p>化学農薬については、熱利用による土壌消毒剤の削減や被覆栽培によるアブラムシ類、スリップス類の侵入防止を基本とし、光を利用した被害軽減対策を行い最小限の薬剤による防除を行う。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 ・定植前に有機質肥料を中心に施用する。	窒素分量 14.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 9.8kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○被覆栽培技術 (対象：アブラムシ類、スリップス類) ○熱利用土壌消毒技術 (対象：茎腐病等) ○光利用技術 ・粘着版利用 (対象：スリップス類等) ・黄色蛍光灯 (対象：ヨトウムシ等) ・反射資材 (対象：スリップス類等) ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 8 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ F₁ 品種は上記窒素分量の 80% 程度の施肥量とする。 ・ 施設の開閉部を透明寒冷紗で覆う。 ・ 害虫発生予防のため、施設周辺の除草を行う。 	

95 ばら

<p>栽培期間が4～5年に及ぶため地力の差が切り花本数・品質に大きな影響を及ぼす。そこでたい肥と有機質肥料の組み合わせにより施肥効率の向上と収量・品質の維持を図る。</p> <p>化学農薬については、こまめな換気等により栽培環境を適正に維持することによって、病害の発生を抑制し、農薬使用回数を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 4t/10a
化学肥料 低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 ・有機質肥料を中心に施用する。	窒素分量 63.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 44.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○生物農薬利用技術（対象：根頭がんしゅ病） ○被覆栽培技術（対象：うどんこ病等） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 41回以下
その他の 留意事項	・施設内の通風・採光を図り窒素過多を避ける。夜温が16℃以下になる場合は加温によって相対湿度を下げる。	

96 ストック

<p>切り花類、野菜類の後作として秋冬期に栽培されているため、前作の残存肥料の影響を受ける事例が見られる。たい肥と有機質肥料の組み合わせにより施肥効率の向上と収量・品質の維持向上を図る。</p> <p>化学農薬については、アブラナ科の花きであるためコナガ等の被害を受けるが、生物農薬及び被覆栽培による侵入防止などを行い、熱利用土壌消毒を行い、最小限の農薬使用にとどめる。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 ・元肥は有機質肥料を中心に施用する。	窒素分量 27.3kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 19.1kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○生物農薬利用技術（対象：コナガ） ○被覆栽培技術（対象：コナガ） ○フェロモン剤利用技術（対象：コナガ） ○熱利用土壌消毒技術（対象：萎凋病等） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 10 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開閉部を透明寒冷紗で覆う。 ・低温期に菌核病が発生しやすいのでは場の排水と換気に留意する。 	

97 りんどう

<p>植え付け時に堆肥等を施用し、初期の土づくりをしっかりと行う。栽植後は、畝間に堆肥、敷きわら等を行い、地力の維持を図る。</p> <p>土壌水分が多すぎると生育が抑制されるので、排水対策を徹底し、農薬の使用を削減する。圃場周辺の環境整備を行い、病虫害の発生を抑え、農薬の使用を低減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	植付時 たい肥 2t/10a 2年目以降 たい肥 1t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術	窒素分量 18.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（雑草防除） ○生物農薬利用技術 ○被覆栽培技術 ○マルチ栽培技術（雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 11回以下
その他の 留意事項		

98 アスター

<p>定植前の土壌診断に基づき、たい肥と有機質肥料、肥効調節型肥料の組み合わせにより、施肥効率の向上と品質の維持向上を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培によるアブラムシ類、シンクイムシの進入防止を基本とし、雑草抑制対策としてはマルチを活用し、使用削減を図る。また、連作により立枯病の被害が多発するため、3～4年の輪作とする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術	窒素分量 20.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類） ○熱利用土壌消毒技術（対象：立枯病） ○天然物質由来農薬利用技	化学農薬の有効成分使用回数 9回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開口部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。 ・ほ場排水に留意し、過湿にならないようにする。 	

99 デルフィニウム

<p>定植前の土壌診断に基づき、たい肥と有機質肥料、肥効調節型肥料の組み合わせにより、施肥効率の向上と品質の維持向上を図る。</p> <p>化学農薬については、熱利用土壌消毒技術の導入による土壌伝染性病害の軽減、被覆栽培によるアブラムシ類の進入防止、雑草抑制対策としてはマルチを活用し、使用削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術	窒素分量 21.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.8kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類） ○熱利用土壌消毒技術（対象：立枯病） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 9回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開口部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。 ・ほ場排水に留意し、過湿にならないようにする。 	

100 宿根スターチス

3～4年以上の据え置き栽培となるので、耕土が深く、排水良好で有機質に富むほ場が適している。生育旺盛で吸肥力が強いので有機質を十分に施用する。定植前の土壌診断に基づき、施肥効率の向上と品質の維持向上を図る。

化学農薬については、換気等により栽培環境を適正に維持することで病害の発生を抑制すると共に、被覆栽培によるアブラムシ類の進入防止、光を利用した被害軽減対策を行い最小限の薬剤による防除を行う。

区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術	植付時 窒素分量 21.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.7kg/10a 以下 2年目以降 窒素分量 26.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 18.2kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術 （対象：アブラムシ類、うどんこ病等） ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：ヨトウムシ等） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 16回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開口部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。 ・うどんこ病対策としては、窒素質肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。 	

101 宿根カスミソウ

<p>定植前の土壌診断に基づき、たい肥と有機質肥料、肥効調節型肥料の組み合わせにより、施肥効率の向上と品質の維持向上を図る。</p> <p>化学農薬については、換気等により栽培環境を適正に維持することで病害の発生を抑制すると共に、被覆栽培によるアブラムシ類の進入防止、光を利用した被害軽減対策を行い最小限の薬剤による防除を行う。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 4t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術	窒素分量 15.6kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術 （対象：アブラムシ類、うどんこ病等） ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：ヨトウムシ等） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 24回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開口部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。 	

102 シンテツポウユリ

<p>定植前の土壌診断に基づき、たい肥と有機質肥料、肥効調節型肥料の組み合わせにより、施肥効率の向上と品質の維持向上を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培によるアブラムシ類の抑制、雑草抑制対策としてはマルチを活用し、使用削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術	窒素分量 34.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 23.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術 （対象：アブラムシ類、スリップス類） ○熱利用土壌消毒技術 ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 19回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設栽培では、開口部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。 ・ほ場排水に留意し、過湿にならないようにする。 	

103 キンギョソウ

<p>定植前の土壌診断に基づき、たい肥と有機質肥料、肥効調節型肥料の組み合わせにより、施肥効率の向上と品質の維持向上を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培によるアブラムシ類、熱利用土壌消毒による菌核病の抑制、雑草抑制対策としてはマルチを活用し、使用削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術	窒素分量 28.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 19.6kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類） ○熱利用土壌消毒技術 ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の開口部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。 ・ほ場排水に留意し、過湿にならないようにする。 	

104 ヒマワリ

<p>定植前の土壌診断に基づき、適正な土壌酸度に調整する。</p> <p>排水性の良いほ場を選定し、排水性の悪いほ場では明渠等の排水対策を行う。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培によるアブラムシ類の進入防止、光利用技術による被害軽減対策を行い、最小限の薬剤による防除を行う。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施肥技術	窒素分量 4.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 2.8kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術（対象：アブラムシ類等） ○光利用技術 ・粘着板（対象：アブラムシ類等） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 9回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・施設の開口部を透明寒冷紗で覆う。 ・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。 	

105 ハボタン

<p>定植前の土壌診断に基づき、たい肥と有機質肥料、肥効調節型肥料の組み合わせにより、施肥効率の向上と品質の維持向上を図る。</p> <p>化学農薬については、ほ場周辺の環境整備や雑草抑制対策としてはマルチを活用し、使用削減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	○局所施肥技術 ○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施肥技術	窒素分量 15.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○被覆栽培技術（対象：ヨトウムシ類等） ○フェロモン剤利用技術（対象：コナガ等） ○光利用技術 ・黄色蛍光灯（対象：ヨトウムシ等） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 12回以下
その他の 留意事項	・害虫発生予防のため、ほ場周辺の除草を行う。	

106 さかき

<p>たい肥・稲わら・刈り草等の施用によって土壌の性質の改善を図り、施肥技術と有機質肥料の施用を組み合わせることで施肥効率の向上を目指し、収量及び品質の維持を図る。</p> <p>化学農薬については、被覆栽培や紫外線除去フィルム等の利用及びマルチ栽培（稲わら）・機械除草による雑草の抑制等により使用回数の低減を図るものとする。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術	たい肥 1t/10a 又は 敷きわら・敷き草 0.8～1.2t/10a
化学肥料 低減技術	○有機質肥料施用技術 ○肥効調節型肥料施用技術	窒素成分量 39.2kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 27.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ・敷きわら・敷き草 ○被覆栽培技術（対象：各種病害虫） ○光利用技術 ・紫外線除去フィルム（対象：輪紋葉枯病） ○天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 11回以下
その他の 留意事項		

107 葉たばこ

<p>暗渠や高畝栽培など排水対策を実施する。</p> <p>たい肥など有機質資材の連用、苦土石灰など土づくり肥料の施用、深耕等の実施により、地力の維持・増進を図る。</p> <p>肥効調節型肥料や有機質肥料の施用により化学肥料の節減を図る。</p> <p>化学農薬については、生物農薬利用、マルチ栽培・機械除草等により農薬使用回数の節減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 1.5t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 12.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 8.4kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> 生物農薬利用技術 （対象：鱗翅目害虫、サツマイモネコブセンチュウ、腰折病、白絹病） <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術（対象：雑草防除） <input type="checkbox"/> 天然物質由来農薬利用技術	化学農薬の有効成分使用回数 6回以下
その他の 留意事項		

108 茶

<p>たい肥・きゅう肥・稲わら・刈り草等の施用によって土壌の性質の改善を図り、施肥技術と有機質肥料の施用を組み合わせることで施肥効率の向上を目指し、収量及び品質の維持を図る。</p> <p>化学農薬については、フェロモン剤の利用による害虫の防除、マルチによる雑草の抑制等により農薬使用回数を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ・土壌診断結果に基づき、適切な完熟稲わらたい肥や牛ふんきゅう肥の8月後半の施用、あるいは、稲わらや刈り草の10月中下旬の施用を基本とする。 ・毎年8月後半に深耕機等を用いて隔畦深耕し、たい肥やきゅう肥及び前年の敷きわら等をすき込む。 	<p>たい肥・きゅう肥 1t/10a 又は 敷きわら・敷き草 0.8～1.2t/10a</p>
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 ・樹冠下施肥を含めた畦間全体への施肥は肥料散布機等を用いて行い、施肥後はクランクカルチ等により攪拌・耕耘する。また、できるだけきめ細かに分施する。秋季及び春季の元肥では有機質肥料を主体にする。 ○肥効調節型肥料施用技術 	<p>窒素成分量 55.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 38.5kg/10a 以下</p>
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 （対象：ハマキムシ類、ヨモギエダシヤク） ○フェロモン剤利用技術（対象：ハマキムシ類） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ・敷きわら・敷き草 ○天然物質由来農薬利用技術 	<p>化学農薬の有効成分使用回数 11回以下</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥及びきゅう肥の施用には自走型たい肥散布機、深耕には自走型自動深耕機の導入も考慮する。 	

109 こんにゃくいも

<p>深耕を実施し、根張りの促進と土壌水分の安定供給を図る。 たいきゅう肥、りん酸質肥料、石灰質肥料を施用し、地力維持・増進と土壌pHの適正化を図る。 禾本科作物との輪作により連作障害や土壌病害の発生を防止する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 14.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○対抗植物利用技術（対象：土壌病害虫） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 7回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・水田転換畑では明渠、高畝栽培、排水溝などによる地表水排除と暗渠などの地下水対策を組合せて乾田化を図る。 	

110 なたね

<p>連作をさげ、土づくりを充分行い初期生育を促進し、根張りを良くする。 栽植密度が高いと病害の発生が多くなるので栽植密度を適正に栽培する。 育苗時に軟弱な生育にならないよう健苗育成に努める。 機械除草等により雑草を抑え、除草剤の使用を控える。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 11.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 7.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○熱利用土壌消毒技術 ○光利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 0回
その他の 留意事項		

111 うるい

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>化学農薬についてはマルチ栽培により除草剤を使用しない。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 18.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 12.8kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

1 1 2 たらのき

<p>たい肥施用を主体とした土壌の性質の改善を図るとともに、作物体の健全な育成、品質の向上を目指した有機質肥料の施用により化学肥料の低減を図る。</p> <p>栽培密植を避け、風通しをよくすることにより使用農薬の低減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素成分量 22.8kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 15.9kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・反射資材（対象：アブラムシ類） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 5 回以下
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場の排水を良好にする。 ・密植を避け、通風をよくする。 	

113 イタリアンライグラス

<p>播種前に、雑草の処理を十分に行い、除草剤の使用を削減する。 効率的な施肥や有機質肥料の利用により化学肥料の使用を削減する。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 ○有機質肥料施用技術 	窒素分量 20.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○光利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 1回以下
その他の 留意事項		

114 ソルガム

<p>播種前に、機械除草等により雑草の発生を抑えるとともに、条播により機械除草を行うなど、除草剤の使用を控るとともに、堆肥等有機質資材の投入により、健全な生育を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 2t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 20.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 14.0kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術（雑草防除） <input type="checkbox"/> 光利用技術 <input type="checkbox"/> 被覆栽培技術 <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項		

1 1 5 飼料用イネ（WCS用イネ及び飼料用米）

<p>畜産との連携により、家畜糞尿等を利用したたい肥の施用を主体とし、さらに緑肥作物等と適宜組み合わせ、水田生産力維持増進を図る。</p> <p>化学肥料についても、たい肥等有機質肥料の施用を基本とし、さらに状況に応じて側条施肥田植、肥効調節型肥料のいずれか又は両方を組み合わせて施用量の節減を図る。</p> <p>化学農薬については、温湯種子消毒による殺虫殺菌剤の使用削減や中耕除草などにより除草剤の削減を行い、あわせて耐病性品種の選定、健全な生育の確保、生育の初期段階における病虫害防除の徹底により農薬の使用回数の節減を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 ○緑肥作物利用技術 	たい肥 2t/10a（※）
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 ○局所施肥技術 ○肥効調節型肥料施用技術 	窒素成分量 10.4kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 7.2kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術 ○機械除草技術（対象：雑草防除） ○除草用動物利用技術（対象：雑草防除） ○生物農薬利用技術 ○抵抗性品種栽培 ○マルチ栽培技術（対象：雑草防除） ○天然物質由来農薬利用技術 	化学農薬の有効成分使用回数 12回以下
その他の留意事項	<p>（※）たい肥等の施用量は、土づくりの進ちよく状況や土壌診断結果に基づいて決定する。なお、飼料用イネは地上部全体を収穫するので、ケイ酸補給のため稲わら、もみがらを主原料としたたい肥の施用が望ましい。</p>	

116 飼料用とうもろこし

<p>播種前に、機械除草等により雑草の発生を抑えたり、雑草の制御のためにマルチとして被覆植物等を利用するなど、除草剤の使用を控える。堆肥等有機質資材の投入により、健全な生育を図る。</p>		
区分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等 施用技術	<input type="checkbox"/> たい肥等有機質資材施用技術 <input type="checkbox"/> 緑肥作物利用技術	たい肥 3t/10a
化学肥料 低減技術	<input type="checkbox"/> 局所施肥技術 <input type="checkbox"/> 肥効調節型肥料施用技術 <input type="checkbox"/> 有機質肥料施用技術	窒素分量 15.0kg/10a 以下 うち化学肥料による窒素 10.5kg/10a 以下
化学農薬 低減技術	<input type="checkbox"/> 機械除草技術 <input type="checkbox"/> マルチ栽培技術	化学農薬の有効成分使用回数 2回以下
その他の 留意事項		